

武蔵野日曜集会

新誠

——ヨハネ伝第13章12～38節——

1984年11月11日(武蔵野)

小池辰雄

信仰・信交・信行 悪魔かれに入りたり 新しき誠命 ゲーテが発見した十誠 互いに相愛する

【ヨハネ13・12～38】

12 彼らの足をあらひ、己が上衣うわぎをとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為なしたることを知るか。13 なんじら我を師また主となう、然か言うは宜うなり、我は是これなり。14 我は主また師なるに、尚なおなんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。15 われ汝らに模範を示せり、わが為しごとく、汝らも為さんためなり。16 誠にまことに汝らに告ぐ、僕はそ主よりもおお、遣つかされたる者は之を遣す者よりも大ならず。17 汝等これらの事を知りて之を行わば幸福さいわいなり。18 これ汝らすべての者につきて言うにあらず、我はわが選えびたる者どもを知る。されど聖書に「我とともにパンを食う者、われに向かいて踵かかとを挙げたり」と云えることは、必ず成就すべきなり。19 今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時、わが夫それなるを汝らの信ぜんためなり。20 誠にまことに汝らに告ぐ、わが遣す者を受くる者は我をうくるなり。我を受くる者は我を遣し給ひし者を受くるなり』

21 イエス此等のことを言い終えて、心さわぎ証あかしをなして言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを売らん』22 弟子たち互いに顔を見合せ、誰につきて言い給うかを訝いぶる。23 イエスの愛したもう一人の弟子、イエスの御胸によりそい居たれば、24 シモン・ペテロ首くびにて示し『誰のことを言い給うか、告げよ』という。25 彼そのまま御胸によりかかりて『主よ、誰なるか』と言ひしに、26 イエス答え給う『わが一撮ひとつかみの食物を浸して与うる者は夫それなり』斯かくて一撮の食物を浸してシモンの子イスカリオテのユダに与えたもう。27 ユダ一撮の食物を受くるや、悪魔かれに入りたり。イエス彼に言いたもう『なんじが為すことを速すみかに為せ』28 席に著つきたる者は一人として何故かく言い給うかを知らず。29 ある人々はユダが財囊かねいれを預るによりて『祭のために要する物を買え』とイエスの言い給えるか、また貧しき者に何か施



さしめ給うならんと思えり。³⁰ ユダ一撮の食物を受くるや、直ちに出づ、時は夜なりき。

³¹ ユダの出でし後、イエス言い給う『今や人の子栄光をうく、神も彼によりて栄光をうけ給う。³² 神かれに由りて栄光をうけ給わば、神も己によりて彼に栄光を与え給わん、直ちに与え給うべし。³³ 若子よ、我なお暫く汝らと偕にあり、汝らは我を尋ねん、然れど曾てユダヤ人に「なんじらは我が往く処に来ること能わず」と言いしごとく今、汝らにも然か言うなり。³⁴ われ新しき誠命を汝らに与う、なんじら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。³⁵ 互いに相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん』

³⁶ シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』イエス答え給う『わが往く処に、なんじは今に従うこと能わず。されど後に従わん』³⁷ ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』³⁸ イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんじ三度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』

●信仰・信交・信行

¹² 彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。¹³ なんじら我を師また主となう、然か言うは宜なり、

その通りだと。

我は是なり。

正に先生であり、また救い主であると。

¹⁴ 我は主また師なるに、尚なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。

先生が弟子の足を洗うなんていうことは、普通はおかしなことなのですが。弟子であるお前たちに私はそういうことをした。まして、お前たちはお互いにやれと。

¹⁵ われ汝らに模範を示せり、わが為ししごとく、汝らも為さんためなり。

『キリストに倣いて』という本がありますが、正にキリストは、自分は模範を示したからお前たちもそのようにしろと。あの『イミタチオ・クリステイ』というのは、こういった言葉も参考になったんでしょね。

¹⁶ 誠にまことに汝らに告ぐ、僕はその主よりも大ならず、遣されたる者は之を遣す者よりも大ならず。

「大ならず」どころではない。キリストは神さまに遣わされて、自分は何もできないで、遣



わされた者として、遣わし給うた神さまの言うことをみんなその力に与ってやっているんだと。

17 汝等これらの事を知りて之を行わば幸福なり。

とにかく、その行為が――プロテスタントは「信仰」と言うけれども、正に、信じ行うという「信行」――「信じ仰ぐ」から「信じ交わる」「信交」にきて、最後は「信じ行う」「信行」が一番大事なところです。まあ始めは仰いでいる。それから、キリストと一つになる。信じ交わる世界。そうしたらば今度は、信じ行う。ゲエテが、

「タート・イスト・アッレス」(行為が一切である)

と『ファウスト』第二部に書いている。だから、行わなければ幸いでないんです。

「恵福なるかな、行う者」

と。哲学的な言葉でいうと「実存」です。自らを投じ出でることです。そこに自分を投げ出して、やっていかなくてはいいかという。「行う」と言ったって、全存在的なことです。

18 これ汝らすべての者につきて言うにあらず、我はわが選ばれたる者どもを知る。されど聖書に「我とともにパンを食う者、われに向いて踵を挙げたり」

と云えることは、必ず成就すべきなり。

恐ろしいことです。これは詩篇41篇9節です。

「わが侍みしところ、わが糧をくらしところのわが親しき友さえも我にそ

むきてその踵をあげたり。」(詩篇41・9)

友を裏切ることなんです。

「ブルータス、汝もか」

というやつです。親友や親しい人に裏切られることほどつらいことはないですね。ユダという弟子は優れた弟子だった。優れた弟子がヘタすると反旗をひるがえす。優れた天使が反旗をひるがえしたのがサタンになったんだから。「敵は本能寺」というわけです。まあこれはと思う人が、

「小池先生なんてのは……」

ということで行った。そういうのが幾人もいます。私の写真をくれなんて言つてね、大いにやっていたのが踵をあげたりした。まあいろんなことでつくわしました。

「我とともにパンを食う者」

というのは、キリストはどこまでも、愛しているんですよ。一緒にパンを与えて食べる。それが裏切る。キリストを売ってしまう。

19 今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時、わが夫なるを汝らの信ぜんためなり。

預言しているわけです。

20 誠にまことに汝らに告ぐ、わが遣す者を受くる者は我をうくるなり。我を



受くる者は我を遣し給いし者を受くるなり』

「わが遣す者」とは使者、使徒たち。

「使徒たちを受くる者は私を受けた。我は遣わされたる者。我を受くる者は、我を遣わした者を、神を受くるのだ」

と。

「神―キリスト―使徒」

ということ。使徒も、信徒もみな同じことです。だから、更にキリストは、

「このいと小さき者を受くる者は我を受くるなり」

と言われた。

「弱き人たちを受くる者は我を受くるなり。キリストを受けることである」

と。

「キリストを愛する」

というのは何も、直接にキリストを愛するのではなくて、こういう人たちを愛することが本当の意味においてキリストを愛することです。

「喉が渴いた者に一杯の水をやったのは私にくれたのだ」

と。マタイ伝の終りの方の、天国に入れるのはどういう人かというところ、そういう行為者が入れる。いわゆる観念信者は入れない。その信が本ものならば、必ず行為が出てくる。それを信行一如という。

●悪魔かれに入りたり

21 イエス此等のことを言い終えて、心さわぎ証^{あかし}をなして言い給う『まことに

誠に汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを売らん』

「心」という字は「プニューマ」という字が書いてあるな。霊において騒ぐ。

22 弟子たち互に顔を見合せ、誰につきて言い給うかを訝^{いふ}る。

一体、誰のことだろうと。みんな分かっていない。それくらいユダというのはわからない。みかけ上、大変結構なんだ。

23 イエスの愛したもう一人の弟子、

ヨハネ、自分のことです。このヨハネ伝では、ヨハネは自分のことを「ヨハネ」と決して言っていない。「イエスの愛したもう者」という言い方をしている。この「愛する」というのは「アガパオー」という天的な愛のことです。

イエスの御胸^みによりそい居たれば、

非常にキリストに寄り添うようにしていたんだね、このヨハネというのは。ヨハネが特別に愛されても、他の人は別にどうということはない。

24 シモン・ペテロ首^{こぶ}にて示し『誰のことを言い給うか、告げよ』という。



ペテロがすぐそういうことを言う。「首にて示し」というのだから、口でないんだから、ちよつと合図したんだ。そうすると分かるんだ。

²⁵ 彼そのまま御胸によりかかりて

よりかかったままで、ヨハネは言う。非常に目で見えるように書いてある。ヨハネは本当にそういうところをありのままを書いている。

『主よ、誰なるか』と言いに、

そつと本当に小さな声で聞いたんでしょね、キリストに。「誰のことですか」と。

²⁶ イエス答え給う『わが一撮の食物を浸して与うる者は夫なり』

「ひとつまみの食物を与える」

というのはやはり親しい間柄の行為なんです。

「さあ、君、おあがりよ」

というわけで、やったわけだ。けれども、キリストはその心の奥をみているんだ。上辺はどうであれ。

斯て一撮の食物を浸してシモンの子イスカリオテのユダに与えたもう。²⁷ ユ

ダ一撮の食物を受くるや、悪魔かれに入たり。

えらいことだね。愛されているのに、逆に悪魔が入ってしまった。心理学的にどういうことになるのか知らんけれども。傲慢になるんだろね、高慢に。

「俺はこんなに愛されている」

と、いい気になってしまつて、そして、逆に働く。恐ろしいことです、これは。

イエス彼に言いたもう『なんじが為すことを速かに為せ』

お前がしたいことを早くしろと。

²⁸ 席に著ぎいたる者は一人として何故かく言い給うかを知らず。

何のことだかわからない。妙なことを仰るなど。

²⁹ ある人々はユダが財囊を預るによりて『祭のために要する物を買え』とい

イエスの言い給えるか、また貧しき者に何か施さしめ給うならんと思えり。

それが「なすべきことを早くしろ」ということだと、そう思うんだね、普通なら。ところが、ユダのなすべきことはとんでもないことなんだ。

³⁰ ユダ一撮の食物を受くるや、直ちに出づ、時は夜なりき。

●新しき誠命

14章からは、いよいよイエスの決別の遺訓ということになる。最後の劇的な場面です。

³¹ ユダの出でし後、イエス言い給う『今や人の子栄光をうく、神も彼によりて栄光をうけ給う。』

「栄光を受ける」と。ここに「栄光」という言葉が四回出てくる。



32 神かれに由りて栄光をうけ給わば、神も己によりて彼に栄光を与え給わん、
直ちに与え給うべし。

「栄光」は「ドクサ」という。この地上でもって普通、栄光と言えば、何か名誉の肩書をもらったり、勲章をもらったり、そんなことが栄光の徴でしようけれども、福音の栄光は違う。福音の栄光の徴は何かというと、十字架なんだ。全然別なんだ。

「栄光を受ける」

というのは十字架にかかって、そして天界に行く。十字架・復活・昇天、これがみんな栄光です。栄光の焦点は十字架なんです。いわゆる

「後世に名をとどむる」

なんていうのも栄光なんだけれどもね、普通の考えでは。「後世に名をとどむる」なんて、そんなことは考えない。『浮世草子』という本を少し読んでみたら、

「後の世に名があがるよりも、俺は一杯の酒の方がいい」

なんていう江戸っ子式な言葉があるけれども(笑)。

この焦点は十字架の光です。まあ大変なもんです、このキリストの言葉は。

33 若子よ、我なお暫く汝らと偕にあり、

もう本当にしばらくだと。

汝らは我を尋ねん、然れど曾てユダヤ人に「なんじらは我が往く処に来るこ

と能わず」と言いしごとく今、汝らにも然か言うなり。

尋ねたつてダメだと。また「いずこに行き給うか」なんて聞くから。今日の主題は第34節です。

34 われ新しき誠命を汝らに与う、なんじら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、

とく、汝らも相愛すべし。

ヨハネ伝13章34節は忘れないように。「新しき誠命」は「エントレー・カイネー」というギリシア語ですけれども、「カイネー」とは、古びない新しさを言う。「ネオス」というのは、古びる新しさ。いわゆる新品はまた古くなるけれども、古びない新しさです。これは永遠に新しいんです。「新約聖書」の「新約」が、これもやつぱり「カイネー」です。「カイネー・ディアテーケー」という。それは何かというと、

なんじら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。

と。この「相愛すべし」の「愛する」という字は「アガパオー」という、天的な、己を棄ててかかる愛のことです。その新しき誠命というのは、相愛するということだと。これは

「互いに足を洗え」

ときつきあつたでしょ。これが「愛する」ことです。

14 我は主また師なるに、尚なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。15 われ汝らに模範を示せり、わが為ししごとく、汝らも為さん



ためなり。

「互いに足を洗う」ということが、「互いに愛する」ということです。相手の汚れをぬぐってやる。贖いの角度の愛です。贖罪的な愛です。人をかばうわけです。

「お前はこんな悪いことをしたじゃないか。かつてはこうだった」

なんて、そんなことは絶対に言わん。全部それは、

「愛はすべての罪を覆う」

という。罪をおおう。罪を担う。

「そんなにもして俺を赦してくれたか。あんなことも忘れてくれたか」

ということ、友人が感激する。「互いに相愛せよ」というのはそのことです。いいですか。感情的に愛しているというのではない。「担い合え」ということです。

「助け合え、担い合え、救い合え」

と。正にこれは「新約」です。新しき新誠です。モーセの「十誠」がある。モーセの十誠もこの新誠にはかなわない。モーセの十誠の中に「愛」という言葉は出てこないでしょ。「敬う」という言葉はあるけれども、「愛」という言葉は出ていない。だから、キリストの一誠はモーセの十誠を越える。モーセの十誠はキリストの一誠に如かずというわけだ。

●ゲエテが発見した十誠

モーセの十誠は出エジプト記20章、申命記5章にある。

「³汝わが面^{かほ}の前に我の外何物をも神とすべからず。⁴偶像を彫^{きざ}んではいかん。

……⁷聖名を妄^{みだ}りにあげてはいかん。⁸安息日を憶えてこれを聖とせよ。……

¹²汝の父母を敬え。¹³殺すなかれ。¹⁴姦淫するなかれ。¹⁵盗むなかれ。¹⁶虚妄^{いつはり}

の証拠^{あかし}をたつるなかれ。……¹⁷貪^{ねむ}るなかれ。」(出エジプト20・3～17)

とあるでしょ。みんな禁令的なのが多い。「……してはいかん」と。

「お前たちはもともとそんなことはしない」

というのが本当の意^{こころ}だということは申しましたけれども。あれから、誠命^{いましめ}としては「なかれ」になる。隠された福音ではありますけれども。

ところで、レビ記19章を開いてください。これは忘れてはいかんですよ。ここに「ゲエテッシュ・デカログ」というのがある。ゲエテが発見した十誠がある。ゲエテという人は聖書をよく読んだ。そして、彼は非常に内観力、直感力があるから、何か発見する。ゲエテはこの19章を読んで気がついたのは、

「我は汝らの神エホバなり」

という言葉がこの節の終りによく出てくる。

「……我はエホバなり。……我はエホバなり」

と。レビ記19章の3節、



「³汝等おのおのその母とその父を畏れまた吾が安息日を守るべし、ここに十誡の二つが出ている。

我は汝らの神エホバなり。」

これは、いわゆるモーセの十誡の方にはこの言葉が出てない。この

「我は汝らの神エホバなり」

という、漬け物の石みたいなのドカーンとくる言葉、これが土台なんです。

「私がエホバだから、お前たちは父母を敬うね。安息日はちゃんと守るね。私がエホバなんだから、私がお前の神さまだから、言わなくたって、やるねえ」

と。この

「我はエホバなり」

という最後の言葉はついたりではない。これが土台なんです。

「⁴汝等虚き物を恃むなかれ、また汝らのために神々を鑄造ることなかれ、我は汝らの神エホバなり。」

これもモーセの十誡の

「偶像を造つてはいかん」

というのと似ている。これはモーセの十誡の中にあるからこれは別に数えない。数えないけれども、この

「我はエホバなり」

というのが大事なんです。

「⁹汝その地の穀物を穫るときには汝等その田野の隅々までを尽く穫るべからず、また汝の穀物の遺穂を拾うべからず。¹⁰また汝の菓樹園の菓を取りつくすべからず、また汝の菓樹園に落ちたる菓を斂むべからず、貧者と旅客のためにこれを遺しておくべし、我は汝らの神エホバなり。」

素晴らしいじゃないですか。これは愛ですよ。誠命は愛の誠命ですから。みんな取つてしまふな、貧しい人たちのために残しておいてやれと。憐れみの心です。憐れみの誠命、これは愛なんです。

「¹¹汝等盗むべからず、偽るべからず、互いに欺くべからず。

これは十誡に似ている。

¹²汝等わが名を指して偽り誓うべからず、

これもそうだ。

また汝の神の名を汚すべからず、我はエホバなり。」

この中にモーセの十誡の三つか四つか出ている。そして、それが「我はエホバなり」と。ゲーテが数え始めたのは14節からなんです。それからずっといくとちようど十ある。

「¹³汝の隣人を虐ぐるべからず、またその物を奪うべからず、傭人の値を明朝



まで汝の許に留めおくべからず。14 汝聾者を誼うべからず、また盲者の前に礙物をおくべからず、汝の神を畏るべし、我はエホバなり。

目の見えない人のためにそういう気持を持たなければいかんと。

15 汝審判をなすに方りて不義を行うべからず、貧窮者を偏り護るべからず、権ある者を曲げて庇くべからず、ただ公義をもて汝の隣を審判べし。16 汝の民の間に往きめぐりて人を誹るべからず、汝の隣人の血をながすべからず、我はエホバなり。

これも殺人の方だね。

17 汝心に汝の兄弟を憎むべからず、必ず汝の隣人を警戒むべし。彼の故によりて罪を身に受くる勿れ。

その次の18節が大事なんです。

18 汝仇をかえすべからず。

復讐してはいかと。

汝の民の子孫に対して怨みを懷くべからず。己のごとく汝の隣を愛すべし。

我はエホバなり。

これが、キリストがつかみだした言葉です。

『己のごとく汝の隣を愛すべし』と旧約にあるだろ。神を愛することと、己の如く隣を愛することは一つだ」

と。「隣」というのはなにも隣りに住んでいる人ではない。でつくわす人はみんな「隣人」です。「万人を」ということです。

「汝、万人を愛せよ。誰でも愛しなさい、甲乙をつけてはいかん」

と。愛し方はいろいろですよ、その相手によってね。けれども、愛そのものは一つです。みなすべてが具体的ですから。ある人にはお金を上げることが愛であるでしょうし、ある人にはいろんなことを教えてあげるのが愛でしょうし、まあいろいろあるわけだ。要するに、観念ではない、具体的に愛しなさい。相手が本当に求めていることを、喜ぶことをやってあげると。

あと、25、28、30、31、32、34、37節。それで十ある。みんな「我はエホバなり」です。これはただ数ではなくて、内容的にいくと、ちゃんと分類できて、それで十になるんです。だぶっているところがありますからね。

要するに、非常にレビ記は、モーセの十誡と違って、愛のことを語っている。憐れみの誡命だね。だから、キリストは「新しき誡命」と言っただけでも、実はこの「新しき誡命」はもう既に旧約にその核ができています。22節に、

「²²而して祭司その人の犯せる罪のためにその愆祭の牡羊をもてエホバの前にこれがために贖罪をなすべし、斯くせばその人の犯せし罪赦されん。」



なんて書いてある。レビ記19章というのは非常に大事なところだ。2節に、

「²汝イスラエルの子孫の全会衆に告げてこれに言え、汝等宜しく聖あるべし、

そは我エホバ汝らの神聖あればなり。」

という有名な言葉がある。聖なる神は聖なる愛をもつて愛するわけだ。聖愛です。ただ聖く、ただお高くとまっているのではない。

中核は、キリストが「足を洗え」と言ったのが正にこの贖いの関係です。

「私がお前の足を洗わなければ関係ない。お前との関係は、私がお前の足を洗うこと、贖罪することなんだ」

と。だから、友人関係も、人と人との関係もお互いに――人間は贖罪はできないけれども――贖罪的な、お互いに担っていく、そのような捨て身の愛だということ。

「プラス・マイナスを勘定するような、そんな愛ではないぞ」と。

●互に相愛する

³⁵互に相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん』

「愛する」というのは、仲良くやって「ワッショイ、ワッショイ」ではない。本当に助け合いの愛です。それはむしろ、互いであると同時にまた外に向かつて、隣人に向かつていく。よく、グループの中は非常に愛が熱いけれども外には一向に、なんていうのはひとつも本当の愛ではない。キリストが山上の垂訓で言っている、

「敵を愛せよ」

というのはそれとは違う。それは聖霊がくると、本当にもう自分が問題じゃないですから、手当たりしだいに動きます。だから、外に行くときには、「エン・クリスト」誌なんかをしよつちゅう持つて行つてください。どういう人にもいいから、「ああこの人に」と思ったら、そしてしゃべりだしたら、

「どうぞ、これを読んでください」

とやらなければダメですよ、本当に。どう思われたつていいんです。

「ものみの塔」だとか何とかは個別訪問してやっているものな。ああいうことをしろとは私は言つてやしないけれども。とにかく、彼らの熱心に負けるようなことではしょうがない。まあ、私の出身の無教会というのは、そういうことは何もしないんだ。ただもう来て、ギリシア語やヘブライ語を勉強しているだけだ、女でも。ダメだよ、そんなのは。それで日曜はただ集会に出ているだけ。そうじゃないですよ。行動しなくては。聖霊の世界と言うならば、お題目になつてはダメです、事実をもつて証し人にならなかつたら。そういう意味で、召団というものは特別な使命があるということを自覚してください。

³⁶シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』



これは、

「主よ、何処にゆき給うか」

どころではないよ。本当は、

「我々は何処に行くか」

だ。人類は何処に行くかと。「主よ、何処にゆき給うか」の答えは実は14章からあとです。「クオバデス・ドミニネ」というのがこれです。あの『クオバデス』という小説はこの句が表題になっている。ペテロがローマを去ろうとした時に現われたあの有名なお話しですね。

「私は十字架にかかる。再びローマに行く」

と言うので、ペテロは引き返した。

イエス答え給う『わが往く処に、なんじは今に従うこと能わず。されど後に

従わん』

「されど後に」というのは即ち、聖霊が来た後にです。ペテロはダメなんだよね、三度キリストを否んだ。それもちゃんとキリストは見えているんだから、キリストは凄いひとだよ、本当に。

37 ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』

と、おおいに力んで言っているんだけど。まあ彼は聖霊が来てから本当に生命を棄てました。けれども、キリストは、

「今はダメだよ、そんなこと言ったつて」

と。

38 イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、

本当に生命を棄てるかと。

誠にまことに汝に告ぐ、なんじ三度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』

「三度否むと鶏が鳴くぞ。そしたら、お前は涙を流す。その先今度は、祈って待っている。聖霊が来る。そうしたら、お前はガラリ変わるぞ」

と。使徒行伝のペテロと福音書のペテロでは大違いなものな。もうはつきりしているんだ。聖霊を受けると、これほどまでに違ってしまいかと。それなのに、聖霊が問題になっていないから、今のキリスト教会も無教会もダメだ。聖霊についてはいろいろ研究するよ。ダメだよ、「ついて」では。「中から」ものを言うようにならなくては。もう勝負あります、本当に。

さきほど言いましたところの栄光は虹のような栄光です。私は虹が大好きだ。ワーズワースの詩もあるね。あのワーズワースの「レインボウ」なんていう詩を中学校で私たちは教わった。非常に印象深かった。今の中学校の教科書に出てないんだ、こういうのが。とんでもないよ、会話ばかりやっていて。なぜ、こういう実のあるものを教えないか。私は中学



校時代を思い出すと、漢文と英語の詩から私の心の一面ができた。漢詩や漢文です。

虹は「天涙」と書く。あの露は、天の涙は光を受けて発する。私はときどき自分の号にも「天涙」と書くことがある。何でもみな上に「天」が付く。聖霊の世界だからね、天は。

御霊の力はそういったことを可能ならしめる。人が嫌がることを黙ってやる。見てようが見ていまいが、そんなことはどうでもいい。

「汝知り給う」

の世界です、『エン・クリスト』9号に書いたように。

そういうことで、

「汝ら、相愛すべし」

と。これが十誠でなくて新誠です。我々はこの新誠に生きる。新誠に生命あり。これに生きるところに本当に生命がある。

11月10日は何の日だか知ってますか。ルターとシラーの誕生日です。シラーの言葉にこういうのがある。

「愛は愛の値打ちを持つている」(Die Liebe hat der Liebe Preis.)

と。愛の値打ちは愛そのものだ。他のものとは代えられないという。絶対的な値打ちを持ったものだということです。ルターの言葉には、

「愛は神の似姿なり」(Liebe ist Ebenbild Gottes.)

とある。いいね、この言葉も。やっぱり、ルターだよな、そういうところは。ゲートにも似たような言葉がある。「愛は神の似姿なり」と。

「神の似姿の如き愛に生きろ」

という。愛は具体的なものだ、観念ではない。だから、「愛は神の似姿なり」とは素晴らしいね。これがヨハネ伝13章の中心は、新しき誠命です。おわります。

